

ART VILLAGE

少しずつ肌寒くなって、あったか～いぜんざいとお茶が恋しい

淡川神社正門前で明治元年から続く老舗和菓子屋・菊水總本店（多聞通3丁目3-15）。併設のお茶屋「菊水茶廊」では、菊の花が香る菊水茶や、栗が丸ごと入った楠公厄除け渋皮栗の餅ぜんざいが味わえます。

季節になったなあ。さて、今年の秋も

イベント盛りだくさんやわ！ 大好評の

今年度からはじまった、ウォーリー木下氏による舞台演劇セレクション「KAVC FLAG COMPANY」。10月～12月はKING&HEAVY、コトリ会議、心劇屋が新作を発表予定！ 詳しくは中面「特報！パフォーミングアーツ瓦版」にて。

演劇プログラムでは、

渾身作を上演！

それと、

新開地・兵庫港・新長田を巡る

アートプロジェクトも見逃せへんなあ。

9月14日（土）～11月10日（日）、新開地・兵庫港・新長田の各地会場にて開催。出演作家はグレゴール・シュナイダー氏とやなぎみわ氏の2人。KAVCを含む各地で作品展示があるほか、野外劇の公演も。詳しくは中面「神戸みちくさ天国」にて！

商店街あげての新開地冬まつりも

12月の第1土・日曜日、新開地の4つの商店街を舞台に開催されるお祭り。新開地のお店や施設が仕切る屋台、ビンゴ大会、フリーマーケット、ステージなど多目押し。

楽しみつつ、たまにはのんびりまちを

散策するんもええもんやで～。

ART VILLAGE VOICE — CONTENTS

KAVC CONVERSATION #03

これからの映画（館）を考える 神戸新開地映画談義 鼎談：板倉史明 × 田中晋平 × 岡本西子
（神戸大学） （神戸映画保存ネットワーク） （KAVC）

STORY KAVCスタッフと、ときどき保安のおっちゃん物語 | STAFF's VOICE KAVCからのお知らせ

KAVC REPORT : Go! Go! High School Project 2019 『半神』

KAVC これ、見た？ REVIEW レビュアー：勅使河原君江 | 新開地新名物 vol.7 新開地商店街の「立ち食いそば四天王」

EVENT SCHEDULE 2019.10-12 | 神戸みちくさ天国 | KAVC パフォーミングアーツ瓦版

www.kavc.or.jp

映画談義

神戸新開地

これからの映画(館)を考える

板倉史明

【神戸大学 国際文化学研究所 准教授】

田中晋平

【神戸映画保存ネットワーク 客員研究員】

岡本酉子

【神戸アートビレッジセンター 映像事業担当】

アートセンターとしての映画事業

岡本：神戸アートビレッジセンター（以下、KAVC）では、2017年の指定管理者変更から現在までの間で、年数回の特集上映と100本を超える作品上映を行ってきました。公共性を重視しながらほかの興行館と差別化を図るため、主にドキュメンタリーや打ち出したいテーマを内包した映画をブックイング。一般的な興行館から見れば上映回数も動員も少ないですが、1本1本に意図を込めて上映しています。板倉：想いの込められたラインナップと、実際の集客のバランスをどうするか。とても難しいことです。岡本：そうなんです。私としては、ひとりでも心に深く残るような映画であってほしいという想いがある。観て終わりではなく、それをきっかけに次の興味や活動へつながっていくような作品選びを心がけています。また、「新開地、KAVCに行けばこの作品が観られる」という期待感も残しておきたいとも考えています。板倉先生の編著書『神戸と映画』^[01]には、映画館と映画を観てきた人たちの歴史についても紐解かれていましたね。

板倉：ありがとうございます。「神戸と映画」と聞いて思い浮かぶのは、トーマス・エジソンが発明したキネトスコープ日本初公開の都市であり、興行街・新開地であり、映画評論家・淀川長治さんです。そういった長く語られてきたトピックをさらに掘り下げながらも、これまで日本映画史には語られてこなかった現場の視点を大切に書籍を編み上げていました。

田中：僕は神戸映画資料館^[02]で神戸や新開地に関わる映画文化の研究を行っているのですが、『神戸と映画』にも1970年代の自主上映に関する論考を寄稿しています。さきほど岡本さんのお話していた「新開地でこの作品が観られること」を大切にしていた組織「グループ無国籍」が1970年代の新開地にもいたんです。岡本：論考、とても興味深く拝読しました。田中：当時の新開地は衰退がかなり進み、映画館も減りは

KAVC CONVERSATION #03



大正から昭和初期にかけて全盛をむかえ、「東の浅草、西の新開地」と称された歓楽街、新開地。その後の1960年代後半から70年代には、娯楽の多様化によって映画館への来場者も減り、まちの様相が大きく変わりました。1958年、新開地に17館あった映画館は、2018年には4館へと縮小。この60年間で、私たちの暮らしぶりも更新され、メディアテクノロジーの発達によって映画を観る文化・環境そのものも一変しつつあります。今回の特集鼎談では、神戸・新開地と密接にあった「映画」そして「映画館」のあり方を、現在のKAVC CINEMAにおける取り組みと紐づけながら考えていきます。

参考：板倉史明 編著『神戸と映画 映画館と観客の記憶』神戸新聞総合出版センター（2019年）、Webサイト「新開地ファン」

じていて、戦前からあった聚楽館や松竹座などもなくなる寸前でした。そんななか、彼らは自分たちが観たい映画を上映するために場所を借り、オールナイト上映を企画したりしていたんですね。今は経営が変わっていますが、新開地のすぐそばにある映画館の「福原国際東映」が会場になりました。当時の彼らの資料やインタビューでは、単純に映画好きということだけではなく、やはり新開地の雰囲気も含め、この場所で自主上映することに意味を見出していたように思います。

——映画を観る選択肢を広げるという意味では、KAVCのあり方とも通じるものがありますね。

田中：そうなんです。1990年代になってから、日本で「公共上映」という言葉が出てきます。これまでももちろん映画を観る場所として映画館があったわけですが、それに加えて、自主上映会や映画祭、KAVCのような公共のアートセンターやホールで行われるような上映も含めて、「公共上映」という概念でとらえましょうというものです。それによって、改めてグループ無国籍のような過去に地域で自主上映を行ってきた人たち、あるいは映画祭などを企画してきた人たちの活動の意義を再確認できるようになった。それは、映画館だけを見てもわからない、神戸映画史のなかのすごく重要な記憶でもあるだろうと思うんです。

岡本：映画を1本上映することで、いろんな可能性が生まれるというのは、先日上映した『奇跡の小学校の物語』^[03]という作品でも実感しました。廃校寸前の小学校が、ある校長先生の活動によって存続できるようになる過程を映したドキュメンタリー作品ですが、神戸の上映後に自主上映を望まれる方が多くいらっしゃった。配給会社の話では、実際に、廃校を迫られている小学校の関係者が上映を観て

KAVCの特集上映は、娯楽性・大衆性を意識していることが多いです。たとえば、2018年の年明けに上映した『新春！ニッポンの喜劇映画セレクション〜日本の笑いのルーツを作った喜劇人たち』では、今みなさんが知っている“笑い”は、ここからはじまったんだよというのが、映画を通して見せてきました。そこに歴史的価値や、当時の影響力も感じてもらえたらなと思って。（岡本）



「参考にした」と話していたそうです。——観る映画の選択肢を広げつつ、社会的にも意義あるものを上映することで、観て楽しむという映画の役割以上の出来事を生み出せたわけですね。

板倉：国立映画アーカイブ^[04]や神戸映画資料館の経験から、映画の熱狂的なファンの人には面白い企画をすればどんなに遠方でも来るというのはわかる。だけど、そのほかの人と映画を深い部分で結びつけるのは至難の技です。だからこそ何か、上映の背景にある強い気持ちが出て伝わることが重要で、同じ強い思いを持った人たちが集まる場も必要なんだと思います。

田中：僕は映画の研究者なので、どうしても映画のことが目に行ってしまうのですが、KAVCがアートセンターとして、美術や舞台など複数の表現分野の方が横断する場だからこそ、いろんな情報交換・交流の場になりうるんじゃないかな。もしかしたら、ほかの新開地の映画館とは異なる、いろんな立場の人たちの声に耳を傾けやすい環境がKAVCにはあったりするのかもしれない。

観る文化のあり方と、その広がり

——『神戸と映画』を読んで、かつては人々の生活の延長線上にあった映画の体験というものに惹かれました。岡本さんはいかがでしたか？

岡本：新開地に華やかな時代があったことは聞いていたのですが、実際に当時の資料や写真などを見てみて、率直にこの時代に戻れたらいいのじゃないかと思えました（笑）。一方で、今私たちKAVCの使命としては、過去の繁栄を取り戻すことだけではないのだろうと思いました。

田中：映画館の観客動員数のピークは1958年。1960年代にテレビが普及し、ほかの娯楽も増えたことで、映画館が大衆娯楽の中心から外れていきます。80年代、東京からミニシアター文化が台頭し、90年代にはシネコンが全国的に増えていきます。現在では、全国にあるスクリーンの約9割を、シネコンが占めている状態です。このように時代が変化していくと、やはり映画を観るということのあり方も変わると思うんです。もちろん、ミニシアターやシネコンは、衰退していた映画文化を盛り返す役割も担っていたので、否定したいわけではまったくありません。ただ、生活と密着したかつての映画体験とは、かたちが大きく変わったのはたしかなんじゃないかと。岡本：そうですね。今は映画を観ることが、どこか特別な行為になっている気がします。

田中：休みの日に友だちと非日常を求めて映画を観るとか、デートで映画館に行くとか。それは楽しいことですが、昔から映画はそういった体験を与えてきていたのですが、生活のルーティンからは少し離れた感じはしますよね。板倉：映画との関わり方で言えば、情報の受け取り方も影響していますよね。「ヒットしていますよ」と煽られると、「自分も観たほうがいいのか」という気持ちになってくる。特に興味はなかったけれど、友だちや知人との関係のなかで話題になっていたら、行ってみようかなと思ったり。根底には、情報でも体験でも、誰かと何かを共有したいという心理がはたらく。現代はSNSなどで自分が観たということを発信し、他者へ共有したい。そういうコミュニケーションの方が、観ることより大事になっている側面はある気がしますね。田中さんがおっしゃるように、映画を観る動機やとらえ方が多様化している。岡本：どんどん複雑になっていますよね。今はインターネットを通して、個人の体験を他者に開くことが当たり前になりましたが、昔にはなかった行為です。

板倉：映画体験の記憶として我々に残っているのは、家から映画館までなんらかの交通機関で足を運び、何時間か映画を観て、また戻ってくるという一連のプロセスですよ。でも最近は、映画を観に行き帰ってくる間の行為さえも変質していると思うんです。——インターネットが持つ開かれた部分が、SNS上でのコミュニケーションも含めた、新しい“観る文化”をかたちづけているとすると、私たちは、映画という文化を、映画館を通して感じるだけではなく、さまざまな体験を通して受け取っているとも考えられますね。

田中：少し話がそれるかもしれませんが、神戸映画資料館の所蔵資料のなかには、チラシやポスター、映画の書籍、撮影機材や映写機といった、フィルム以外の映画関連の資料があるんです。業界用語では「ノンフィルム資料」と呼んだりします。以前、国立映画アーカイブの岡田秀則さんに講演をしていただいたことがあるのですが、実はチラシやポスターのようなノンフィルム資料こそ、私たちが日常的に触れている、もしかしたらフィルムよりも身近な映画文化なのではないかとおっしゃっていました。板倉さんがさきほど話していらしたように、映画を観る体験が変化しているなかあって、もう少し広い視点で映画文化をとらえることも必要なのかもしれないですね。

岡本：KAVCではアーカイブ資料を所蔵していないのですが、映画文化の多様な入口として、フィルムアーカイブだけでなくノンフィルム資料を考えるというのは興味深いですし、活用も考えてみたいです。田中：作品の上映を通して、映画が盛り上がるという側面はありますが、一方で大量に残っているチラシやポスターにも過去の映画文化を想像させてくれる価値がありますね。岡本：そうですね。ただ、どこまで資料＝入口とするのが難しいと思うのですが、神戸映画資料館では、どのように考えているんですか？

田中：どこまで資料と考えています（笑）。当館は2007年に開館しましたが、それまでの前史が長くてもともと1974年から自主上映グループとして活動していた「プラネット映画資料図書館」^[05]代表の安井喜雄さん

が館長で、彼らが収集してきたフィルムや資料をもとに立ち上がった施設なんです。ノンフィルムのなかには、たとえば神戸も含めた各地の映画館の写真やプログラムもあるし、いろんな映像作家、スタッフの方が映画製作の過程に残したメモなどもあります。価値があるかどうかわからない場合も基本的にそれらを捨てることはないですね。できるだけ工夫しながら整理して、棚に分けて置いていくようにして。やっぱり、研究者の方などにこういうものを利用していただくことで、我々だけでは読み解けない価値が見出されるかもしれない。そういう可能性を残していくことも大切だなと思います。

地域と映画の接点を見出す

岡本：新開地としての取り組みについて話しますと、2018年から、神戸にある4つの映画館——KAVC、バルシネマしんこうえん、Cinema KOBE、元町映画館の連携による「KOBE CINEMA PORT フェス」を開催しているんです。各館それぞれの色が出る特集上映を組み合わせ、まちなかで行き来が生まれるように地域の飲食店との連携をはかるなど試行錯誤しています。板倉：どういった経緯ではじまったものなんですか？

岡本：映画評論家の淀川長治さんが生まれた土地ということもあって、新開地で映画で盛り上げようという意図で企画しています。今年は、映画を観てもらわなくて、映画監督の西尾孔志さんによる映像&映画講座や、3時間で映画をつくる参加型のワークショップなどの開催が決まっています。

田中：今、いろんな地域である種のメディアリテラシー教育として、映画講座のようなものも増えていますね。僕も大学で映画についての授業を担当していますが、学生が映画に興味を持つだけでなく、実際に映画館にも向かう、そのきっかけをつくるには苦戦しています。板倉さんも大学で教えていらっしゃるんですよね。板倉：大学の一般教養の授業で、映画学の基礎を毎年教えています。それは映画を観るときに、単に物語の展開の面白さや俳優の美しさだけではない部分に注目して映画を楽しみましょうというものです。その視点、観る技術を伝えています。たとえば、製作者の立場からすると、編集の仕方、俳優の立ち位置、背景のセット、使われている小道具・衣装など、無数にある選択肢から選んで意味があるものを画面に入れ込んでいるわけなんです。完成した映画のすべての画面と音の要素にはなんらかの意味があるという前提で、映画の研究をしているんですよ、という話からはじめて、これまで気にしていなかった部分に着目していく視点を授業のなかで身につけていく。

岡本：私は、大学院で映画批評を少し学んだことがあり、同じように鑑賞・分析のためのテクニックを教わりました。そこで「あ、そういう見方があるのか」と発見がありました。作品を別の角度から分析的に面白がるのが、私はもともと好きだったんだと。

田中：神戸映画資料館でも一般の人が参加できる講座をよくやっていますが、映画好きのコアな人も来ているのですが、神戸を舞台にした映画の上映企画も行って、いわゆる映画好きではない、神戸というまちに興味があるとか、登場人物のモダンなファッションが見たいとか、いろんな入口から自分の興味と結びつけながら、映画を観ようという方がいらっしゃいますね。

——今、KAVCとして、映画館で行われていることを地域と結びつけて発信したいという想いもあります。そのときに「地域」

をどう考えるか、どう見るかという視点についても伺いたいです。

田中：「神戸と映画」のなかで、バルシネマしんこうえん



書籍『神戸と映画』の巻末に神戸市内の映画館マップを掲載しました。神戸映像アーカイブ実行委員会が主体となって、神戸沿岸部8区の1958年の映画館をマッピング。地図のおもしろいところは、昔の新開地の賑わいを知らない人も、パッと見ただけで「え、こんなに映画館がたくさんあったの？」と驚く。自分が住んでいるすぐ横にも映画館があったかもしれない。人々の生活と映画文化の関係を、地図というかたちで示すことができるのかなど。（田中）

のオーナー・小山康之さんにインタビューをさせていただきました。バルシネマは、小山さんのお父さんが経営していた新公園劇場を受け継いだ施設なんです。あの街という印象が強かった新開地の映画館を、少しずつ女性でも訪れやすくするために、いろんなことに気を遣いながら、「この映画館で映画を観たい」というお客さんを育てています。映画館という場所そのものに対する“思い入れ”を、映画が“面白い”ということと同時に、大事にしている。どこにいても映画が観られる今、「これからの映画館」を考えるとき、バルシネマ、そしてKAVCやCinema KOBEなどの個別の場の魅力に気づいていくような流れを、どうつくっていくかが重要だと思いました。

岡本：たしかに、映画を観ることで、終わりではなく、映画館という場として、育ていくことが大事ですね。KAVCを含め、映画館が地域とつながり、受け入れられながら発展していくために必要な「場への愛着」とは何か、これから実践しながら探っていけたらと思います。

収録：2019年8月28日（水）KAVCにて

[01] 板倉史明編著『神戸と映画』神戸新聞総合出版センター（2019年）

日本映画史に多くの足跡を残す「神戸と映画」の関わりを、12人の執筆それぞれ視点で紐解く。「盛り場」新開地から「都市」三宮へ／日本映画史、神戸にはじまる／神戸新開地のトーカー反対争論／残片跡の映画興行をめぐる占領と復興／ミニシアター・シネコンからその先へ／絵巻物に見る神戸の映画史／ほか。

[02] 神戸映画資料館

大阪のプラネット映画資料図書館が1970年代から収集・保存してきた世界各地でつくられたフィルムのコレクションをベースに、2007年にオープン。劇映画、ドキュメンタリー、アニメーション、ホームムービーなどのフィルムが約18,000本、映画関連の書籍が約10,000冊、そのほか映画ポスターやパンフレットなど多数所蔵。また、映写や撮影、編集、録音に使う機材も資料として保管されている。併設のミニシアターでは、週末に古典的名作から現代作品まで幅広い映画を上映している。

[03] 安孫子巨監督『奇跡の小学校の物語』（2018年）

栃木県宇都宮市古賀志町、古賀志山の山麓にある城山小学校を舞台に、少子化の波に押された地域の現状、そして廃校の危機を乗り越えようとする地域住民と学校が丸となる姿をとらえたドキュメンタリー作品。地域の魅力を掘り起こし、移住者を呼び込み、高齢者が活躍する給食農園をつくり、と前途多難な状況で赴任してきた校長先生が、さまざまなアイデアで学校を立て直してゆく姿を記録していた。企画・制作はミルインターナショナル（現・ミルフィルム）。

[04] 国立映画アーカイブ

1952年に設置された国立近代美術館のフィルム・ライブラリーにはじまり、1970年の機能拡充による東京国立近代美術館フィルムセンター開館とその後の活動を経て、2018年に設立した日本唯一の国立映画専門機関。所蔵フィルムは79,509本（2017年3月31日時点）。うち日本映画70,164本、外国映画9,345本。映画の保存・研究・公開を通して映画文化の振興をはかるため、「映画保存・公開の拠点」「映画に関するさまざまな教育拠点」「映画を通じた国際連携・協力の拠点」という3つの機能を設けている。参照：国立映画アーカイブWebサイト

[05] プラネット映画資料図書館

1974年に映画関係の書籍やパンフレット、ポスターなどの資料や映画フィルムの収集・保存する民間のアーカイブとして設立。代表・安井喜雄氏独自の調査・収集活動によって集められたフィルムは、サイレント時代の劇映画やドキュメンタリーから、教育映画、成人映画、TVアニメに至るまで幅広く、これまでに映画史的価値の高いフィルムも多数発見されています。

板倉史明（いたくら・ふみあき）

博士（人間・環境学）。東京国立近代美術館フィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）研究員を経て、2012年より現職。著者に「映画と移民——在米日系移民の映画受容とアイデンティティ」新報社（2016年）、編者に「神戸と映画——映画館と観客の記憶」神戸新聞総合出版センター（2019年）など。

田中晋平（たなか・しんへい）

博士（芸術文化学）。共著に「現代映画思想論の行方：ベンヤミン、ジョイスから黒澤明、宮崎駿まで」異洋書房（2010年）。論文に「祖米帰りの映画における孤児たちの共同体」（『映像学』第91号）、1970年代後半の関西における自主上映について」（『藝術』第40号）など。

岡本酉子（おかもと・ゆうこ）

大学院で「笑い」を研究する一方、地域文化政策についても学ぶ。2014年に公益財団法人神戸市民文化振興財団の職員に。区民センターで地域事業に携わった後、2017年4月よりKAVCの映画事業の担当となる。これまでの経験を活かしながら、全国でも数少ない公共施設でありながら興行映画を行うKAVCの番組編成に取り組んでいる。

KAVC REPORT

Go! Go! High School Project
2019 『半神』



最終リハーサル中の様子。姉シュラと家庭教師のシーンより



稽古中の様子



KAVCが2009年に立ち上げた高校生のための演劇ワークショップ&公演プロジェクト「Go! Go! High School Project (通称ゴーハイ)」。毎夏、演出家・大塚雅史氏のもと、高校生が学校の枠を越えて仲間たちと芝居をつくり上げる。過去のゴーハイ参加者によるサポートに加え、今年から演出助手に劇団プロテアトルのFOペレラ宏一朗氏をむかえ、10日間の稽古期間を経て成果発表公演を行った。

本企画は、今年で11年目。ゴーハイの稽古のためにKAVCを訪れる高校生の集団を見ると、「また、この時期がきたな」と感じるほどに、KAVCの「夏の風物詩」とも言える名物プログラムだ。今年は兵庫県内を中心に14校24人の高校生が参加した。彼ら“ゴーハイ生”は、演出の大塚氏、ペレラ氏とともに萩尾望都・野田秀樹の名作『半神』に挑んだ。物語のあらすじはこうだ。結合双生児の姉妹を中心に、家庭教師と両親、そしてその様子を異界から見守る怪物たちによって物語は展開する。姉のシュラは知能が高く言葉も鋭いが醜い容姿を持っていた。一方、妹のマリアは、愛らしく周囲の寵愛を集めながらも知能が低く話すこともできない。そんな妹を姉は疎ましく感じていた。10歳を目前にして、衰弱していく2人の身体。生きるためには身体を切り離し、どちらかが死ななければならない。

稽古期間も終盤にさしかかった頃。本番さながら、KAVCホールを稽古場として、24人が2チームに分かれて稽古に臨む。すでにセリフは頭のな

かにある状態で、場面ごとの立ち位置と発声のタイミング、周囲と連動する動きを確認し、調整を繰り返していく。姉妹の間にある愛情、身体を分ける孤独といった、想像するのも難しい感情を前にして、ゴーハイ生たちの苦戦する姿が垣間見えた。

演出家・大塚氏からの演技指導も熱が入るなか、家庭教師役のゴーハイ生に全員の視線が集まる。場面は、身体を切り離され、すでに妹がこの世にいないと知った姉シュラと家庭教師が初対面するところだ。ベッドの端に腰かけ、悲しげに視線を落とすシュラに家庭教師が声をかける。しかし、その声の調子や身振り、演技に込める感情を実感できないのか、大塚氏から助言を受けながらも、自らの演技にじっくりこなし、という様子のままその日の稽古は終わった。

「11年目ひとつの通過点。一番の目的は演劇の好きな人、関わっていきたくて思ってくれる人を育てることです」と大塚氏。初参加のペレラ氏は「ゴーハイOG・OBのサポートが手厚い。大塚さんのフィードバックを理解して、高校生に伝えるつなぎ役もやってくれています。演劇教育だけでなく人を育てる場になっているからこそ、これまで企画が続いてきたのだと感じます」と語る。大塚氏いわく、「伝えたいたいは演劇論ではなく、みんなできつくり上げる達成感や面白さ、ひとりではないことを知ること。作品の出来はおまけみたいなもんやな(笑)」。

8/25(日)の成果発表公演は、ゴーハイ生の家族や同級生、ゴーハイOB・OGなど多くの人たちが見守るなか、ゴーハイ生それぞれが向き合った時間を自らの身体で表現していった。

物語も終盤、姉シュラと家庭教師の場面にさしかかる。誰かの寂しさや孤独に寄り添い、気持ちを推し量ろうとするとき、どんな体の動かし方で、どんな声を出したらいいのか。前出のゴーハイ生が選んだのは、身かがめて視線を合わせ、声のトーンを落としながらゆっくりと話すことだった。

演技はもちろん、現実の日常生活においてもたくさんの選択肢のなかから自分が思う「正解」を選びとる。そしてその「正解」は絶対ではない。だからこそ、今高校生の彼らが、自分以外の誰かの感情を理解しようと、向き合って選択をしたことに意味がある。そうだったひとは手に入れることのできない小さな変化が、彼ら一人ひとりのなかに積み重なっていくところこそゴーハイの醍醐味がある。

神戸みちくさ天国

神戸アートビレッジセンターで日々開催される、さまざまな催しごと。合わせて「せっかくならここも行ってき〜!」と背中を押したい、魅力的な道草スポットをご紹介します。

title: 三重野展/illustration: 沖真典

KAVCで、TRANS- 展覧作品を体験し、「ART CYCLE」に乗って変わりゆく新開地のまちを巡る



ART PROJECT KOBE 2019 TRANS-

神戸の3エリアで展開されるアートプロジェクト「TRANS-」にて、まちの風景や歴史的な文脈をさまざまなかたちに「Transform(=変換)」させる周遊型作品、グレイゴール・シュナイダー「美術館の終焉-12の道行き」が展示されます。KAVCでは、第5留「消費される生産」と題した映像作品「シュナイダー家」(家up)「死の家up」を上映。期間中、子どもたちが自転車にペイントを施した「ART CYCLE」も貸出。新開地のまちの記憶に触れながら、作品を巡ってみては。

アートプロジェクト KOBE 2019: TRANS-
何かを「飛び越え、あちろへ向かう」をコンセプトに、新開地、兵庫港、新長田で開催されるアートプロジェクト。兵庫県出身の現代美術家、やなぎみわによる野郎劇公演を神戸市中央卸売市場の特設会場で行うほか、ドイツ出身の作家、グレイゴール・シュナイダーによる12のインスタレーション作品をまちなかに展開。
会場: 2019年9月14日(土)~11月10日(日)
会場: 新開地地区、兵庫港地区、新長田地区
出演作家: グレイゴール・シュナイダー、やなぎみわ
※ART CYCLEは「TRANS-PASSENGER ticket」をご購入の方のみレンタルいただけます。

新開地新名物



商店街に漂う出汁のにおい、そして暖簾の向こう側にひしめく立ち食い中の人と。新開地のまちの景色をつくる立ち食いそば屋で、まずは神戸定番の「ぼっかけそば」を。

ゆずちゃん 神戸市兵庫区新開地2-7-18
ゆずちゃん 神戸市兵庫区新開地1-7
高橋さほ 神戸市兵庫区新開地2-3
たつ子 神戸市兵庫区新開地2-3 新開地

推薦者 辻井修(庶務・貸座敷担当)



最終リハーサル中の様子

その前に

日本の大黒天と融合した、アメリカ生まれの神様に会え

1907年にアメリカの彫刻家が夢想した幸運の神・ピリケン。世界中で流行し、明治時代末期、日本に輸入されました。そこで大黒天と混ざり、右手に小籠を持つ表情も豊かな「ジャンピリケン」が誕生。松尾稲荷神社には大正末期に奉納され、現在は福の神「松福様」として安置されています。

松尾稲荷神社 神戸市兵庫区新開地3-21-3



松福様



旧湊川の記憶を継ぐ 田村金魚池で、水面を眺める

現在の湊川公園西側には、旧湊川の古い流路が転じてできた大きな池「川池」がありました。その南方にあった金魚の養殖池＝「金魚池」の名を引き継ぎ、明治25年に創業したのが「田村金魚池」店。店内には水槽が所狭しと並び、現在は熱帯魚、海水魚、錦鯉などの取り扱いも。

有限会社 田村金魚池 神戸市兵庫区新開地1-4-22 定休日: 火曜日

その後に

「真面目にぶさける」を貫く、メンバー各々の遊びが効いたこれぞ、王道娯楽演劇作品!

演出家・ウォーリー木下氏がディレクターとなりスタートした、関西7劇団による演劇プログラム「KAVC FLAG COMPANY」。3番手は、神戸大学演劇部自由劇場出身3名による演劇グループ「KING & HEAVY」。ショークラスやコント大会にも多数出演する彼らが、旗揚げ公演以来となる新作長編「ゴールデンエイジ」を上演します。「この先どうやっていくのだろうとワクワクしてもらえる作品」と語るのにはメンバーの館嶋松之助氏。

演出家・ウォーリー木下氏がディレクターとなりスタートした、関西7劇団による演劇プログラム「KAVC FLAG COMPANY」。3番手は、神戸大学演劇部自由劇場出身3名による演劇グループ「KING & HEAVY」。ショークラスやコント大会にも多数出演する彼らが、旗揚げ公演以来となる新作長編「ゴールデンエイジ」を上演します。「この先どうやっていくのだろうとワクワクしてもらえる

KAVCスタッフと、 ときどき保安のおっちゃん ときどき動物園



ヴィジョン・クリエイション・NEW やきそば! 屋台もクリエイティブねん

KAVCスタッフと、
ときどき保安のおっちゃん物語とは……

本館の隠れた主人公・保安のおっちゃん3人衆のかたわらで、日々業務に励むKAVCスタッフ。彼らが見つめる新開地とKAVCの日常から、さまざまなエピソードを紹介していきます。

作・画 すずきひろゆき
鈴木裕之さん

本誌を機会に新開地デビューを果たした大阪出身・在住のイラストレーター。雑誌やCDジャケット、広告ほか、全国さまざまなイベントでの似顔絵屋、ワークショップなど活動中!

KAVCのいま

神戸 戸アートビレッジセンターは新開地商店街のなかにあります。商店街のなかにあるというのは、単なる立地のことではなくて、KAVCは商店街の一員である、ということです。春には商店街の総会が、夏と冬にはお祭りが、秋には親睦旅行があります。1年を通じてさまざまな行事に参加しながら、新開地の人たちと顔なじみになっていきます。8月第1土曜・日曜日の「夏まつり」、12月第1土・日曜日の「冬まつり」では、多くの親子連れで新開地が賑わいます。KAVCスタッフも商店街のメンバーとして、「お楽しみ券」を引き替えたり、ビンゴカードを売ったり、KAVC内で子ども向けワークショップをしたりと大忙しです。また、新開地ではパレードも重要なアイテムで、まつりのときには阿波踊りの賑やかな連が鳴り物入りで練り歩き、5月の「新開地音楽祭」では消防音楽隊がオープニングパレードを飾ります。KAVCも最近は商店街に飛び出してパレードをしたり、ダンスをしたりする企画を取り入れています。気軽に遊びに来てください!



執筆者

近藤のぞみ [事業チーフ]

学生時代に興味を持ったアートマネジメント。こうして今の仕事につながっているとは感慨深い!



KAVC
まるかぶりっ!
かぶっ
クラブ
KAVCの活動がわかる、
特典付きメンバーシップ
詳細はこちら

STAFF'S VOICE

KAVCスタッフが日々活動するなかで、興味を持ったものごとをざっくばらんに紹介していきます。オススメイベントの詳細な情報はWebサイトにて!

VOICE 01

「KAVC FLAG COMPANY」……普段呼ぶには少し長いので略称をつけたいのですが、アルファベットの頭文字を取ると、あれ、なんか見たことあるぞ……となってしまう、いまだに模索中……そして絶賛募集中! 良い案があれば教えてください! さて、そんなKAVC FLAG COMPANY 2019-2020も

10月から後半戦! 見逃さない劇団のラインナップがドドッと続きます。5劇団を全部観られて11,000円の5劇団共通パスも絶賛発売中です!

前田詩穂

[演劇アシスタント]

VOICE 02

KAVCは開館23年目! 日々新しい出来事が到来する一方で、経年ゆえの劣化で使用に黄色信号赤信号もちらほら……。各所こまめにメンテナンスが施されていますが、2020年1月~3月にはホールとシアターの照明設備を大幅に改修する予定です! それに伴う貸出休止期間など、ご不便をおかけしますが、新しい装備にぜひご期待ください!

河合なお [映画アシスタント]

宝塚高校演劇科、総勢80名の生徒さんが、NTLive「リア王」を鑑賞するためKAVCシアターにやってきました。少しショッキングな演出で第一幕が暗転した瞬間、大きなざわめきで場内は騒然とした雰囲気! シアター全体が一体化した空気を感じることができたのは、映写担当した私にとっても、刺激的な上映会となりました!

VOICE 03

神戸アートビレッジセンター

www.kavc.or.jp

指定管理者: 公益財団法人 神戸市民文化振興財団

〒652-0811 神戸市兵庫区新開地5-3-14

TEL = 078-512-5500 FAX = 078-512-5356

開館時間 = 10:00-22:00 休館日 = 毎週日曜日

(火曜が祝日の場合は翌日)・年末年始



- ・神戸高速「新開地駅」8番出口より徒歩約5分
- ・JR「神戸駅」ピエラ神戸口より徒歩約10分
- ・神戸市営地下鉄「湊川公園駅」東改札口より徒歩約15分